

2015  
ジェイプラス  
Vol.3

# J-plus

ジェイフイード® ペグロックシステム

## Users' Report

地方独立行政法人 神奈川県立病院機構  
神奈川県立こども医療センター（横浜市）

# 家族の団らんを実現できる 胃瘻管理

経管栄養管理でも家族と同じ食事ができるミキサー食のメリット——



人と医療のあいだに...

**JMS**

# 経管栄養管理を していても、 家族で食事を するために—



外科 医長 北河 徳彦 先生(左上) 外来看護師 原 希代美 さん(左下) 管理栄養士 中村 早織 さん(右上) 石川 容子 さん(右下)

近年、胃瘻造設は小児においても普及しつつあり、家族の団らんを含めたQOLの向上が望まれています。そこで今回、胃瘻からのミキサー食注入を推奨する神奈川県立こども医療センターの外科医長北河徳彦先生、外来看護師の原希代美さん、石川容子さん、管理栄養士の中村早織さんに小児における胃瘻造設の現状をうかがいました。

## 小児での経管栄養管理の現在

### 増加する小児胃瘻造設

小児の摂食障害に対しては、主に経鼻経管栄養管理が行われていました。しかし近年、小児に対する胃瘻造設症例が増加しており、神奈川県立こども医療センターでも現在約320名の胃瘻管理を行っています。胃瘻造設する患児さんは2000年代以降急激に増加したと北河先生は話します。「急増した理由としては、成人に対する胃瘻造設が普及したこと、内視鏡的胃瘻造設術(PEG)の確立により大きな手術をしなくてもよくなったことが挙げられますが、最大の理由は、お母さん方のクチコミです。胃瘻造設に挑戦したご家族の『胃瘻にして良かった!』という思いが広く認知されました。お母さん方のネットワークの伝達力はこちらが想像する以上に影響力が大きいのです」

最近では、ご家族が胃瘻を「体に穴をあけるもの」と捉えて観念的に拒絶されることがほとんどなくなったとのことでした。

小児科で胃瘻造設の対象となるのは、主に脳性麻痺の患児さんです。主治医となる神経内科の医師達にも胃瘻造設のメリットが理解され、医師からご家族に胃瘻を勧めるケースが増えたことも理由のひとつであるようです。

### 胃瘻造設時には、胃瘻外来でメリットを解説

患児さんの増加に伴い、神奈川県立こども医療センターでは、専門

的なフォローを行うための胃瘻外来を毎週火曜日に設置しています。「胃瘻外来では、ご家族に事前に問診表を渡し、医師の診察前に看護師が問診をしています。胃瘻に関する悩みや困ったことをすべて事前に聞き出して、受診時に医師に報告し、カルテに記入します。看護師も交代勤務ですが、カルテの確認を通しての情報共有ができています」

看護師の石川さんは、問診表を事前に記入してもらうことでトラブル情報の共有と解決ができるといいます。患児さんやご家族の悩みを事前に把握したうえで診察できることから、現在の胃瘻外来のシステムは24時間の電話対応とともに有益であるようです。

胃瘻外来では、胃瘻造設前のご家族への対応も行っています。「胃瘻造設前にメリットとデメリットをしっかりと説明することが大切です。当院では、人形で作った胃瘻モデルを見せて構造を理解していただきます。それに加えて、私は3つメリットを話します。

1つ目は、チューブレスになることです。経鼻チューブが喉を常に刺激している状態をなくすることができるため、不快感がなくなります。2つ目は安全性の高さです。胃瘻による経管栄養管理であれば、チューブが気管に入ってしまったり、食道で止まってしまったという事故は起きません。

そして、3つ目はミキサー食の注入ができるということです。7Fr.の経鼻チューブでは難しいですが、胃瘻では18Fr.以上のチューブを使用できるため、ミキサー食注入を実施することができます」

北河先生は、経管栄養管理の中でメリットの多いミキサー食注入が可能となるのが、胃瘻造設の最大のメリットだと感じています。

## QOL向上につながるミキサー食注入の導入

### 家族と一緒に食事ができるミキサー食注入

胃瘻外来を支える北河先生達は、栄養サポートチームとしても活動しており、アレルギー科の医師と協力して、経管栄養管理でのミキサー食注入を推奨しています。ミキサー食注入とは、通常の食事をミキサーでペースト状とし、胃瘻チューブから注入することです。

ミキサー食注入は、メリットが多い栄養管理であると管理栄養士の中村さんは話します。

「まず、注入時間が10分程度と短くて済むため、食事にかかる時間を短縮でき、外出やリハビリの時間に回せるというメリットがあります。また、半固形の食事をとることで、便性が改善します。下痢が減りますので、おむつ替えなどの負担も軽減されます。

何より最大のメリットはご家族と同じものを一緒に食べられることです。味を感じるため、患児さんの表情が明るくなります」

ミキサー食は食卓の椅子に座った状態で注入できるので、ベッドで栄養剤を注入する必要もありません。ご家族と同じメニューをご家族と同じ食卓で味わうことができます。中村さんは、「栄養剤は食事だと思ったことはないが、ミキサー食にしたら食事だと思えるようになりました」というお母さんの声が忘れられないといいます。



北河 徳彦 先生  
(写真右)

中村 早織 さん  
(写真左)

さらにミキサー食注入では外出も可能です。最近では、事前に依頼すればミキサー食に対応してくれるレストランやホテルも少なくありません。ご家族の方からも「自然と外出先が増えた」「家族で旅行や遊園地に行けた」という喜びの声が多数報告されています。

北河先生が診察している中では、ミキサー食注入を始めたことで経口摂取トレーニングが進んだ患児さんも増えているとのこと。

「患児さんが食事に興味を持ちやすいという点もミキサー食注入のメリットです。ただし、胃瘻チューブが詰まりやすいこと、逆流防止弁が劣化しやすいという点には、注意しながら進めていただきたいと思います」

### ミキサー食注入に適した ジェイフィード® ペグロックシステム

ミキサー食の準備は、ご家族の食事の準備にひと手間加えるだけ。1皿ずつ「ポタポタたら〜り」というペースト状になるまでミキサーにかけるだけです。ただし、食物繊維ごとミキサーにかけるため、内径の太い栄養チューブが必要です。そこで、北河先生は、ミキサー食の注入に

適した胃瘻チューブの選択が大切だといいます。

「ミキサー食注入をしている方には、胃瘻チューブ交換時にジェイフィード® ペグロックシステム(以下、ペグロックシステム)を紹介しています。内径が太く詰まりにくい点、接続部をロックでき、注入時の飛び散りを防止できる点の2つは、ミキサー食注入において大きなメリットだと思います。特に、接続部のロック機構について説明すると、ほとんどのご家族が非常に喜ばれます。実際に、ペグロックシステムにした方から飛び散ったという話は聞きません」

内径の太さは、ミキサー食準備の手間の軽減にもつながっていると中村さんは話します。

「家庭用と業務用とではミキサーの性能が異なるため、出来上がったミキサー食の滑らかさが違います。家庭用ミキサーでは、裏ごしが必要な場合もあり、戸惑うご家族の方が多かったようです。この製品の太さであれば、裏ごしは必要ないと聞きます」

「内径が太い点は、薬剤の注入時にも有効です。経管栄養管理の場合、服薬も栄養チューブ経由で行います。そのため、溶けにくい薬ですと、詰まらないよう注意をする必要があるため、薬を注入するのもストレスになってしまうようです」

看護師の原さんは、ご家族から、ペグロックシステムなら酸化マグネシウムや漢方薬の投与もスムーズだという声も聞くそうです。



最近では、1〜2歳での胃瘻導入、2〜3歳の頃からミキサー食注入を希望されるご家族が増えているようです。北河先生は、3歳程度の患児さんへの使用経験もあるとのこと。しかし、バルーン規定容量が15mLの製品では、幼児への使用に抵抗があったといいます。

「バルーン規定容量の小さい製品が必要であることをJMSの担当者に伝えていたところ、早急に5mLの製品を作ってくれました。バルーンの破損も経験したことはありません。JMSの対応の速さにはいつも感謝していますし、製品の質の良さにも感心しています」



原 希代美 さん  
(写真右)

石川 容子 さん  
(写真左)

## 経管栄養管理における QOL 向上のために

### 無理をしないことがミキサー食注入を続けるポイント

ミキサー食注入の普及を目指し、栄養サポートチームでは、2012年から年4回「胃ろうからのミキサー食注入講習会」を開催しています。参加者の総数は前回で105名を数え、そのうちの8割がミキサー食注入を開始しました。

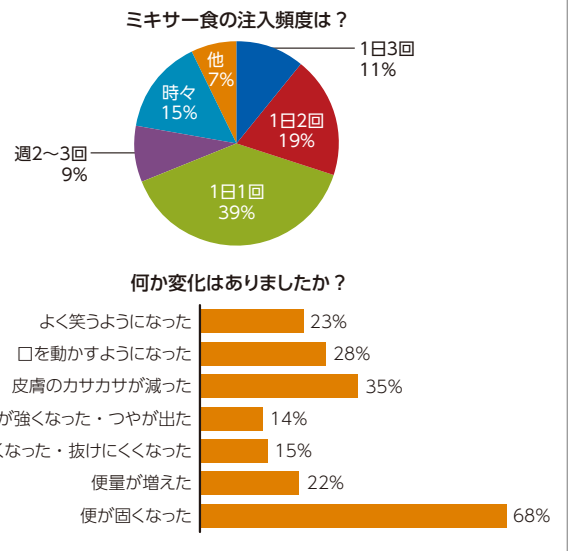
北河先生は、手順を知りミキサー食を実際に目で確認できる講習会が、ご家族の理解の手助けに一番効果的だと話します。

「半信半疑で参加されるご家族の方にも、想像よりも簡単で、ストレスもトラブルも少ないことを理解していただいています」

最近では訪問看護施設や病院等の看護師・管理栄養士、養護学校の教諭・行政職の皆さんも興味を持ち、全国各地から問い合わせがあるそうです。そこで、栄養サポートチームではパンフレットを作成、配布しています(写真)。

ミキサー食注入を開始し、続けるポイントは、無理をしないことだと中村さんはいいます。

「ミキサー食注入は生活スタイルに合わせる事が大切だと考えています。当院で行っている方も、1日1回もしくは週に何回かはミキサー食で、液体栄養剤と併用しているという方がほとんどです(図)」



(図) ミキサー食注入に関するご家族へのアンケート  
(神奈川県立子ども医療センター胃瘻外来調べ:2013年9~11月)



(写真) 栄養サポートチームが作成した  
ミキサー食注入の解説パンフレット  
<http://kanagawa-pho.jp/osirase/byouin/kodomo/download/pdf/patient/mixer1403.pdf>

「ミキサー食注入を強制して、ご家族の方も疲れてしまうのではマイナスです。レトルト食品の併用を含め、続けられる範囲で行うことが大切です」

石川さんも胃瘻外来で、無理をしないでよいですよと伝えているそうです。その思いは原さんも同じ。

「胃瘻造設をする患児さんは、食事以外にも様々なケアを必要としている場合がほとんどです。ご家族一緒という点が大切だからこそ、私達の推奨がご家族の負担にならないようにしたいと思います」

北河先生は、「難しいことは何もないのです」と気負わずに始めてみることを勧めています。今後も患児さんとご家族のQOL向上のために、ミキサー食注入の普及が望まれます。

### 地方独立行政法人 神奈川県立病院機構 神奈川県立子ども医療センター

- 開設 / 1970年に神奈川県立子ども医療センター設置
- 所在地 / 神奈川県横浜市
- 病床数 / 419床(肢体不自由児施設、重症心身障害児施設含む)
- 職員数 / 1,090名
- 診療科目 / 総合診療科、救急診療科、集中治療科、アレルギー科、遺伝科、輸血科、感染免疫科、血液・再生医療科、循環器内科、神経内科、新生児科、内分泌代謝科、腎臓内科、児童思春期精神科、放射線科、外科、整形外科、形成外科、脳神経外科、心臓血管外科、皮膚科、泌尿器科、眼科、耳鼻いんこう科、歯科、麻酔科、病理診断科、リハビリテーション科、産婦人科、母性内科

